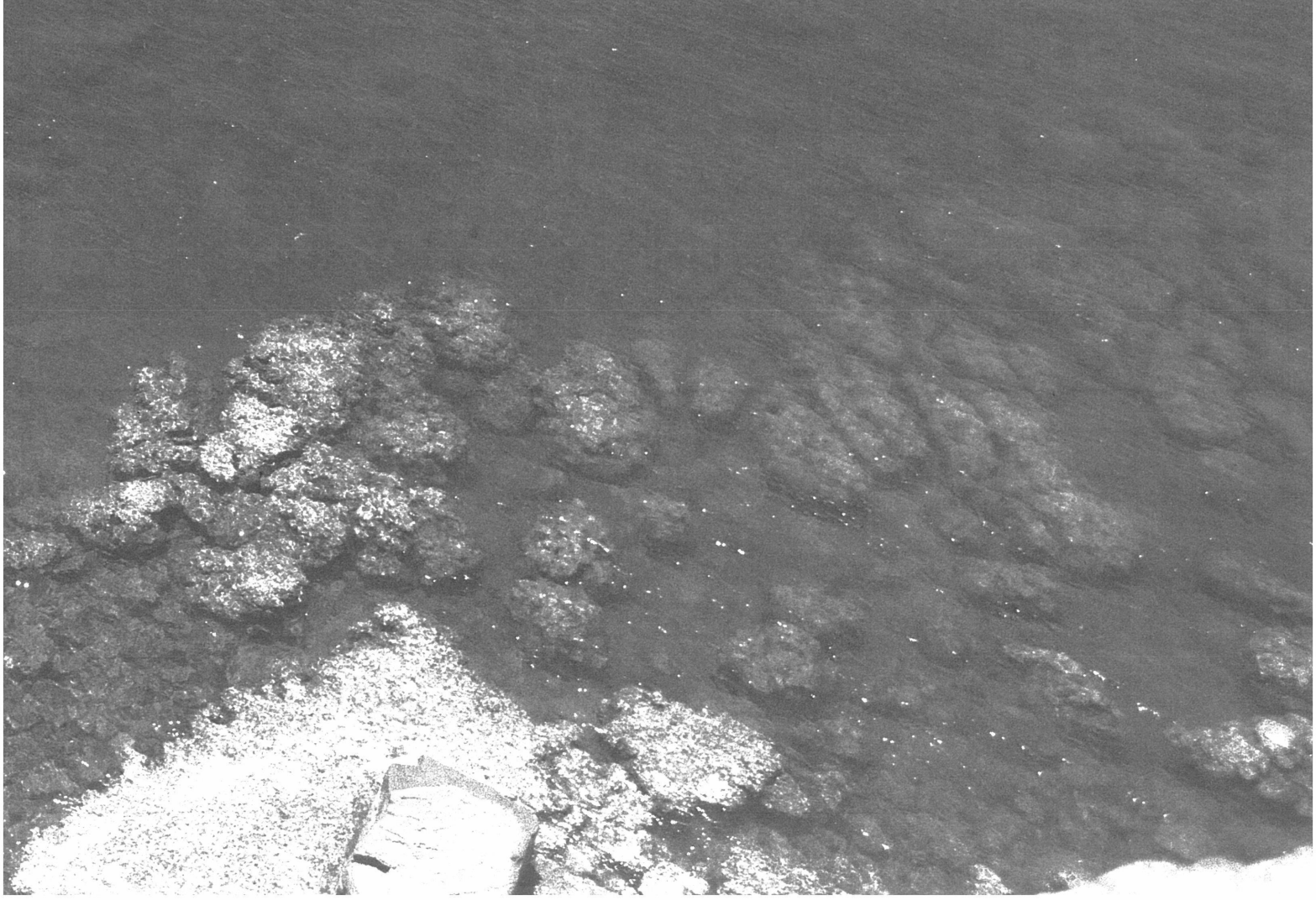
緊急特集

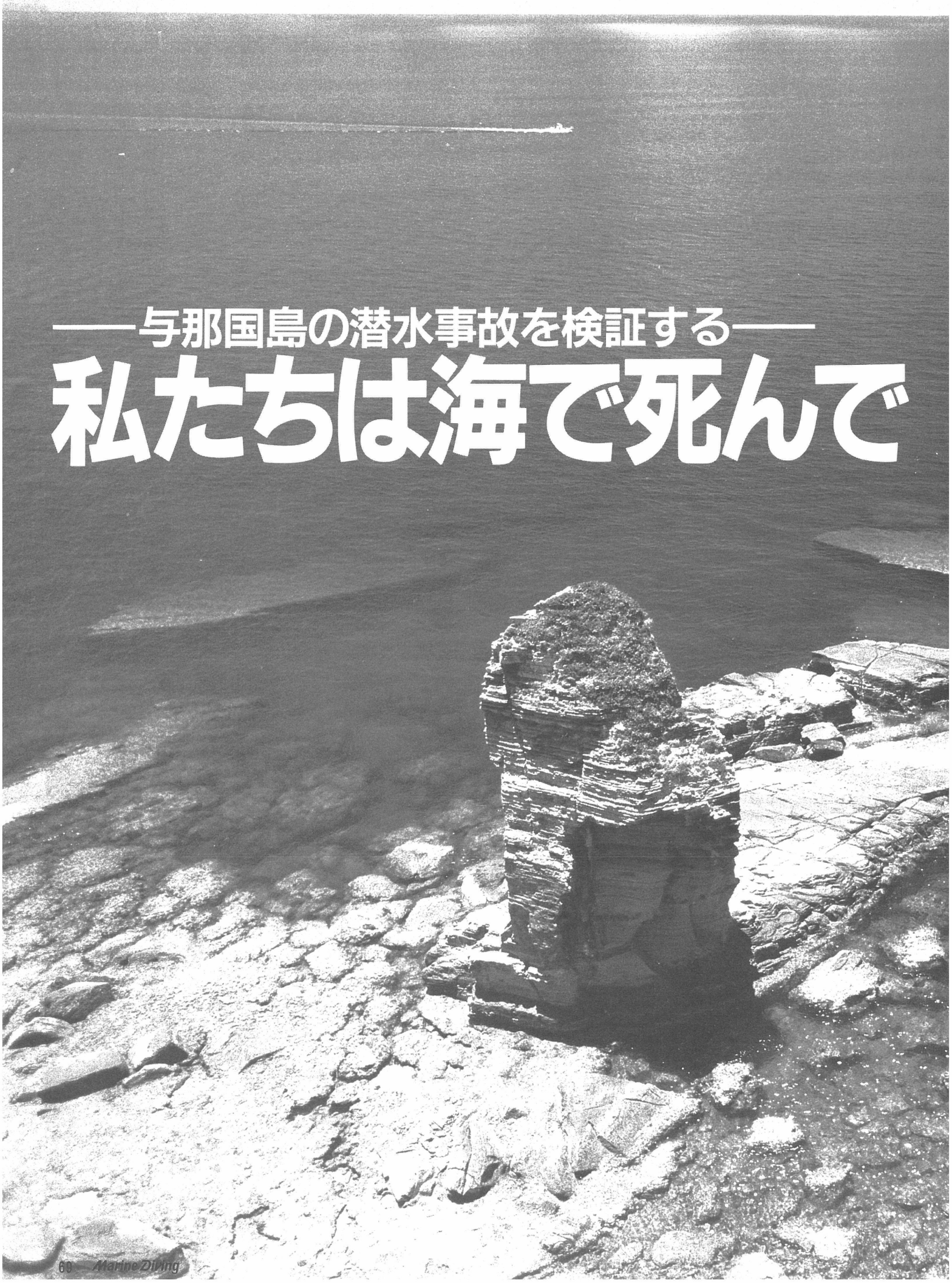
Diving Document for Safety

はいけない!

昨年の潜水事故の死者は18名であった。しかし、今年は9月20日現在で、すでに20名の死者を出してしまっている。この要因はなんなのか。本誌では、その要因を探るため、与那国島での潜水事故をクローズアップした。そして、冒険ダイビングについての覆面座談会を急拠行い、その要因を追求した。さらに冒険的要素の潜水事故をピックアップし、事故の原因と対策を探ってみた。

レポート／鷲尾紘一郎　写真提供／フォーカス　撮影／草野慎二





——与那国島の潜水事故を検証する——

私たちは海で死んで

▲草野氏が撮影したサバチ洞くつ入口

与那国島の潜水事故の謎を探る！

約30メートルの海底で折り重なって死亡

今年に入ってすでに26件もの潜水事故が起きている。その中でもっとも衝撃的な事故が、沖縄の与那国島で起きた洞くつ内での潜水事故である。

本誌は、一度に3名もの尊い人命を奪ったこの潜水事故を検証したい。そして、2度とこのような不幸をくり返さないために、どのようなことをすればよいのかを考えてみたい。

検証に入る前に、事故のあらましを読売新聞（8月20日朝刊）から紹介しよう。

◉

『海底散歩3人水死』
――沖縄・与那国島ツアー

八月十九日午後零時十分ごろ、沖縄県・与那国島の与那国町二〇二、遊漁船「祥太一世」号（一三トン）の新嵩喜八郎船長（四〇）から石垣海上保安部に「スキューバダイビング中の八人のうち三人が行方不明になった」と連絡があった。巡視艇が急行したところ、新嵩船長らが、海底洞くつで水死していた男性二人、女性一人をすでに引き揚げていた。

同保安部の調べによると、死亡したのは東京都狛江市の民宿ガイド業手伝い浦山美穂さん（二二五）、大阪市天王寺区のマリンショップ「アクアゾーン」社長桝谷光宏さん（三七）、同市西成区の喫茶店経営河合満さん（四二）。

新嵩船長は本土からのダイバー七人と浦山さんを同号に乗せ、与那国島南側にあるカタバル浜に案内。八人は、約四十メートル沖の水深約三十メートルの所にある毎氏洞くつ、通称「サバチ洞くつ」に、午前十時半ごろから潜水した。ところが、潜水予定の四十分を過ぎても三人が浮上しないため、新嵩船長とダイバー一人が洞くつに潜ったところ、入り口から約四十メートルの海底に折り重なって倒れている三人を見つけ、午後一時五十分ごろ引き揚げたが、三人とも死亡していた。

同保安部は、新嵩船長や同行したダイバーらから潜水時の状況を聞いているが、なぜ三人が一度に事故に遭ったのか不明。

洞くつが入り組んだ複雑な構造になっていることから、迷い込んで出口を探すうちに、タンクの空気がなくなった可能性もあるものとみて、現場の地形を検証するとともに、潜水具に故障がなかったかどうかについても調べることにしている。

桝谷さんと河合さんは今月十六日、ダイビングツアーで同島に渡り、浦山さんも二週間前から新嵩船長が経営する民宿・ガイド業のアルバイトをしていた。

家族によると、浦山さんは三年前、川崎市内のダイビングスクールで講習を受け、伊豆半島の海岸などで百数十回の潜水を経験している。沖縄を訪れたのは、二年前に次いで二度目。

サバチ洞くつは、島南岸の西側寄り。三、四十メートル沖で切り立った〝海中断がい〟となり、壁面に浸食でできた大小無数の洞くつを総称してサバチ（くり）洞くつと呼んでおり、ダイビングのスポットとなっている。

◉

――かなり長い引用だが、この記事で潜水事故の概要はほぼつかめたと思う。

緊急特集

Diving Document for Safety

この日の海は、潮が上下とも逆に流れていた

では、なぜこのような事故が起きたのだろうか。また事故が起きたところは、はたしてどんなところだろうか。

本誌は、潜水事故が起きたとき、たまたま与那国島へ潜りにきていて、写真週刊誌『フォーカス』の取材をするため、事故現場のサバチ洞くつに潜った草野慎二氏とコンタクトをとった。そして、そのときの状況を詳細に語ってもらった。

——草野さんが与那国島へ行かれたのはいつですか？

草野　8月6日です。勤めていた会社を辞めたので、ノンビリ1人で潜ろうと思って与那国へきたんです。

——与那国の海はどんな印象ですか？

草野　海の地形がダイナミックで、潮の流れが速いスポットが多く、正直いって怖い海ですね。だから、よほど優秀なガイドがいないとダイビングするのは無理だと思いました。

——事故の起きた当日は、海の状況はどうでした？

草野　この日、朝から《与那国ダイビングサービス》の船で西崎を通りサバチ洞くつ側へ行こうとしたんですが、うねりが高かったので、急拠、北側のナカビシというスポットに変更になりました。そして、エントリーしたんですけど、水面と中層では潮の流れがぜんぜん違い、アーチにたどりつけませんでした。そして、午後に再度アーチに行こうと同じスポットへ行ったんです。ところがこのときも潮の流れが上と下とでは違い、けっきょく2本ともアーチに行けず「こんなこともあるのかなあ」といって、船長と一緒に港へ帰ったんです。午後3時すぎでした。そのとき《サーウェス》さんの船が猛烈なスピードで港へ入ってきたんです。

ふだんなら船の2階には人がいるはずなんだけど、みんな下に集まって何かを囲んでいる様子でした。

——その時の船に事故者が乗っていたのですか。

草野　そうです。港はもう大変な騒ぎです。たまたま居合せた地元の人の話だと事故者の3人とも顔中アワだらけだった。とくに体格のいい人は、アワで顔が見えなかったくらい……。

——アワはどこから出たんですか？

草野　鼻と口からです。女性はマスクがずれて顔についていた。ああ、海は怖いな、と思いましたね。

洞くつ内では、突然、怖くなることがある

——事故現場へ潜ったのはいつですか

草野　2日後の21日です。新潮社の『フォーカス』の方がきて、ぜひ事故現場の写真を撮りたい、ということで一緒に潜ることになったんです。

——潜ったのは、21日の何時ですか。

草野　午後3時半です。

——このサバチ洞くつは《サーウェス》しか潜らないのですか？

草野　雑誌のスポットのガイドで見たことはありますが、私の利用したサービスでは行っていませんでした。

——その時潜ったのは誰ですか？

草野　『フォーカス』の方2人とヘルパーの女性、私と《与那国ダイビングサービス》の合計6人です。

——サバチ洞くつはどんなとこですか。

草野　崖がストーンとそのまま落ちた感じです。水温27℃、透明度は40㍍です。洞くつは上から見たんじゃぜんぜんわかりません。

——この洞くつは慣れた人じゃないとわからない場所ですか。

草野　そうです。漁師が釣りをしていて大きな魚が釣れる、すると魚はこの洞くつに逃げ込んでしまうので糸が切れちゃうらしいんですよ。

——潜ってみた感じはどうですか？

草野　不気味ですね。事件後ということもありましたけど……。

——洞くつの中は暗いのですか？

草野　洞くつの1つ目の穴はそうでもないです。入口から光線が入りますから……。

——その一番最初の洞くつはどのくらいの広さですか。

草野　30坪ぐらいです。そして、その奥にもう1つ洞くつがあります。その洞くつの上には亀裂があり、うっすらと明かりが射し込んでいるんです。そして、その先にもまだ洞くつがあります。

——洞くつは全部でいくつあるんですか？

草野　5つあるといってます。それも上がったり、さがったりしている。これは遺体を引き揚げた人がいっていました。

——洞くつ内は岩礁ですか？

草野　そうです。岩礁です。ただ底は砂と小石で、フィンでかいても視界がそれほど悪くなるということはありません。ストロボをたくと、白くハレーションが起きる程度です。

——草野さんたちはいくつ目の洞くつまで入ったんですか？

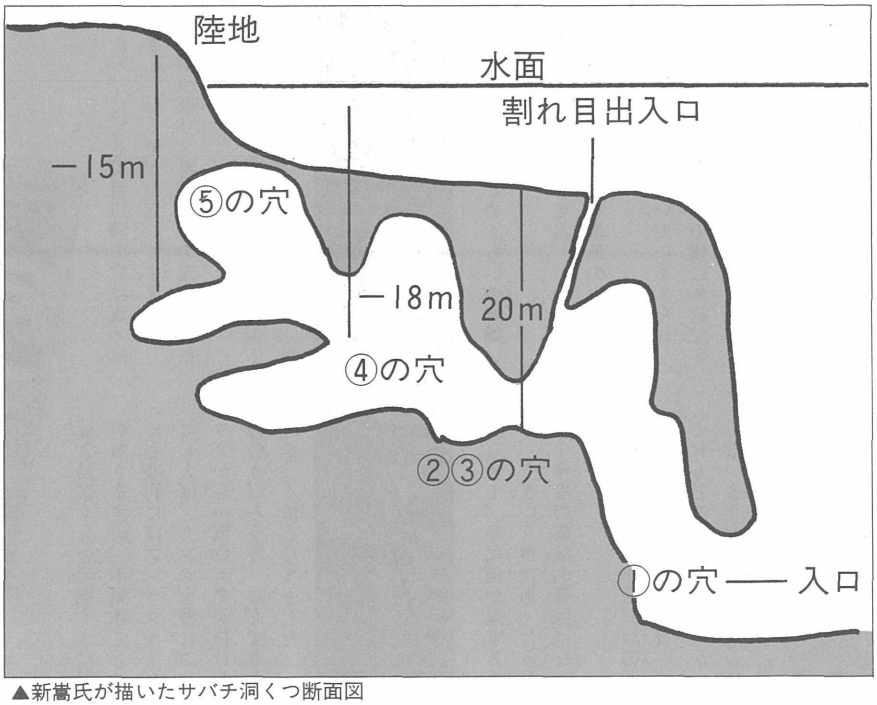
草野　2つ目の洞くつまでです。奥まで入ってミイラとりがミイラになったのでは話になりませんからね。それに『フォーカス』の人も、洞くつの入口を撮りたい、ということでしたので……。

——本誌の調べでは、一番奥の洞くつで浦山さんと桝谷さんが重なって倒れていて、河合さんが一人離れていたそうです。遺体には砂がかかっていたらしいんですが。

草野　洞くつの中でパニックになったんでしょうね。

——1番目、2番目の穴は危険は感じないですか？

草野　感じませんね。光線が入ってま



▲新嵩氏が描いたサバチ洞くつ断面図

▲洞くつ内の海底は小石と砂利で、フィンでけってもあまりにごらない

海底散歩3人水死

沖縄・与那国島ツアー

洞くつの中、迷い？

東京の女性ダイバーら

1989年(平成元年)8月20日 日曜日

海中洞穴で3人死ぬ

サンゴ礁、ダイビング中

沖縄・与那国島

ガラすきなのに「普通車」

グリーン"押

目立つ初

法規

すから。ただ3番目以降の穴は真っ暗ですし、行く気がしないですよ。

——やっぱり3番目以降の穴が問題になりますか？

草野　そうですね。ぼくも、この洞くつじゃないですけど、水深35㍍で、奥行き15㍍くらいの洞くつに潜ったことがありますが、不気味でしたよ。ことに心理的にはプレッシャーを感じます。たとえば、タンクを壁にぶつけて、バルブから一気にエアが抜けたら一巻の終わりだろうな、なんて考えたら、ものすごく怖くなりました。

複雑な洞くつがパニックを呼んだ？

——洞くつには、どのくらいの時間いましたか？

草野　20分くらいですね。

——今度の潜水事故を地元の人はどういっていますか？

草野　地元の人は驚いていましたね。与那国島では、初めての死亡事故だと言っていました。

——この洞窟は《サーウェス》以外ガイドしてないようですね。

草野　私の知ってる範囲ではそうです。地元でも訳のわからない洞くつなんか潜らせて、今に何か起きるんじゃないか、そういう声はあったみたいですよ。

——今度の事故の要因はなんだと思いますか。

草野　やっぱり水深35㍍の洞くつに潜らせるということじゃないでしょうか。それもどこまで奥深いのか、よくわからないような洞くつに潜らせたことが要因じゃないですか。もし、ツアーでぼくが連れていかれたら、そうとうビビルと思いますよ。それに横穴でも深くなったり浅くなったりして、ドラム

カンのような平行した単純な穴じゃないでしょう。たとえエアが100あっても、恐怖感を感じたら、あっという間になくなると思います。たとえば、1人が洞くつの中でパニックになったら、本人を水面へ浮上させることができないでしょう。それに暗いし、狭いし、全員がパニックになる危険性が高いと思います。

——しかも、この洞くつに9人が入ったわけですから……

草野 あんな狭いところへ9人なんて恐ろしいですね。それに洞くつの中には魚がぜんぜんいないでしょう。なんの楽しみもないですよ。だから一度恐怖感をもったら気をまぎらわすものがないですから。

——今回の事故は、複雑な洞くつを選んだことに問題があるようですね。

草野 私も実際に潜ってみて、それを感じました。今後は、こういった洞くつでのダイビングを禁止したほうがいいんじゃないでしょうか。最後に、今後二度とこのような事故が起きないことを切望します。

新嵩氏に事故の原因を聞いてみた！

この潜水事故をガイドしている《サーウェス》の新嵩オーナーは、この事故をどう考えているのだろうか。本誌はさっそく《サーウェス》に電話を入れてみた。

——与那国島での潜水事故は、今、大問題になっていますが、なぜあのような洞くつにダイバーを入れたのでしょうか。またその責任についてどう考えていますか？

新嵩 責任ってなんですか？ もし私が責任を感じますといったら、これは私自身大変なことになるんです。

——では責任はないと？

新嵩 どういう主旨の取材ですか？

——ですから、あのような深い海底の洞くつにダイバーを入れ、潜水事故が起きてしまったということは、現地のガイドとして責任があると思うのですが……。

新嵩 あのような洞くつといったって、洞くつは大きくて50坪もあるような広いところですよ。

——でも、どうしてガイドロープなり命綱をもって入らなかったのでしょうか。

新嵩 電話でやりとりしても仕方がない。あなた自身が一度、与那国へいらっしゃい。そして、実際に洞くつの中に潜ってみてからあなたの意見を言ってください。

——しかし、なぜ、あの洞くつにダイバーを入れたのですか。その目的はなんだったのでしょうか？

新嵩 もちろんダイビングです。ただ桝谷さんや河合さんがエビを取りたいというので、2人はエビを取り、他の人たちは洞くつダイビングを楽しんだんです。この洞くつは、私が昔から潜っているので、内部はよく知っているし、安全な洞くつです。

——それでは、事故が起きるまでのいきさつをお聞きしたいんです。

新嵩 なくなった桝谷さんと河合さんが与那国へ来られたのは、8月16日です。17日からダイビングを始めました。桝谷さんは与那国で4～5年前に《極東潜研》に勤め、半年ぐらい潜水工事をやっているんです。その仕事のあい間にエビを取ったりして楽しんでいたんです。今回もお連れしたお客さん(河合さん)にエビを食べさせたいと思ったんじゃないですか。

——事故の起きた19日は、どのような様子だったのですか？

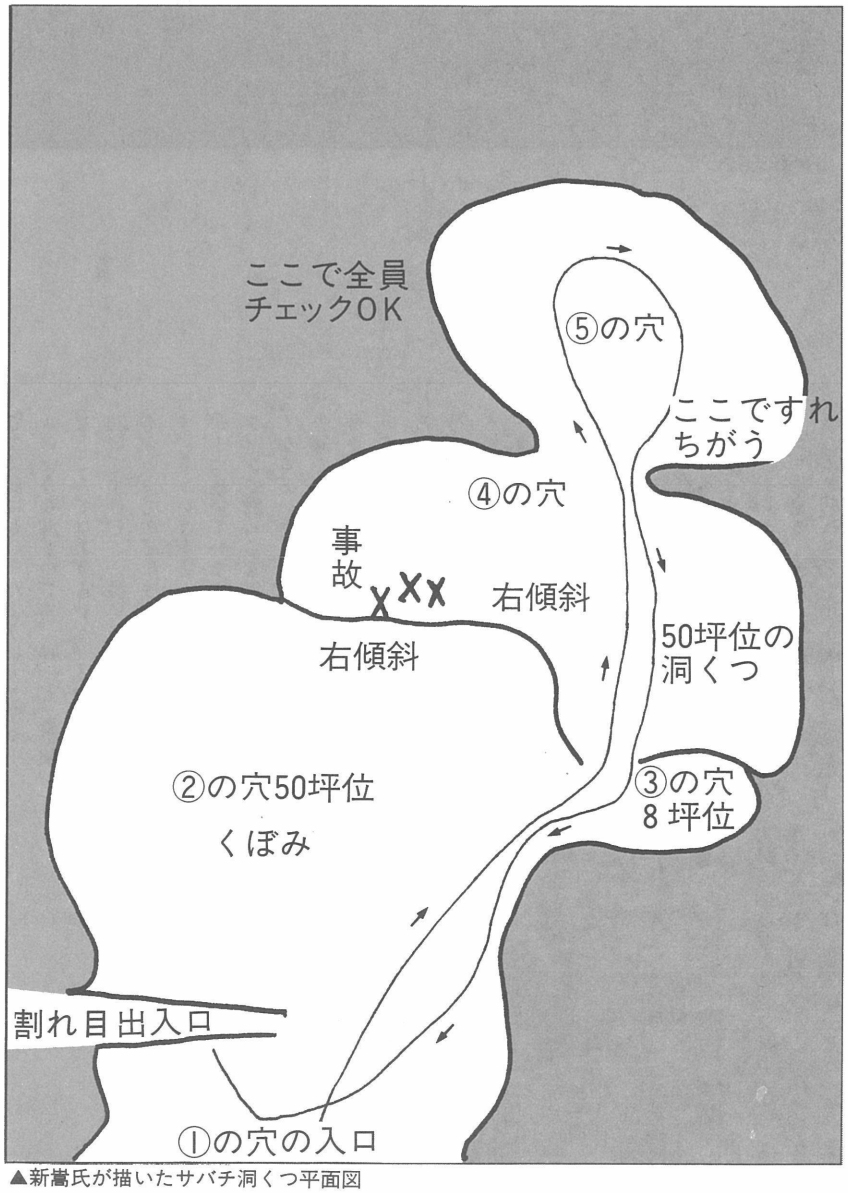
新嵩 19日は、桝谷さんと河合さん、それに私の友人の知り合いの浦山さんの3人が一緒に潜ったんです。桝谷さんはバディを決めず「新嵩さんのあとについてください」ってお客さんにいっていました。私はお客さんを連れて先頭に立ち、洞くつへ入ったのです。時間は午前10時35分です。

——そのとき、桝谷さんや河合さんに異常はなかったのですか？

新嵩 実は、前日の18日に西崎のスポットへ潜ったとき、河合さんが風邪をひいているらしくて、エントリーして5分くらいしたら耳が痛いといって、鼻血を出しながらあがってきたんです。そして、その日は潜らず、港から宿に帰るときに雑貨屋へ風邪薬を買いに行ってるんです。そして、桝谷さんが「オレがガイドするから連れていってくれ」というんです。19日は午後6時からサンセットクルーズをやる予定でした。それと、洞くつでは、ゴシキエビやイセエビが棚にいっぱいいたので、それを取って料理するということで桝谷さんも張り切っていたのです。私も女房にそのための野菜を買わせたりしていました。ですから船には、ダイバーのほかに私たちの家族と友人の家族も乗せていたんです。

——午前10時35分にエントリーして、その後のことを聞きたいのですが？

新嵩 エントリーして洞くつの中で私はお客さんをガイドして潜っていたん



▲新嵩氏が描いたサバチ洞くつ平面図

▲①の穴の洞くつ内は割れ目から光線が入っていたが、不気味だったと草野氏はいう

です。前にもいったように大きなホールのような洞くつです。けっして危険なところではありません。入口は水深30㍍ですけど、一番奥の穴は水深15㍍くらいにだんだん浅くなっているんです。そういうホールが3つ、小さいのが1つ続いています。底は砂ですが、フィンで蹴っても舞いあがって見えなくなるということはありません。私が先頭でガイドしました。桝谷さんと河合さんと浦山さんの3人はあとからついてきました。一番奥のホールのところへあとから来て、そこで全員のエアをチェックして、私は入口の棚のところで待っていたんです。何の変化もない通常のダイビングでした。

——すれ違って、そのあとすぐに新嵩さんはあがったんですか。

新嵩　お客さんの中で竹村さんという方がいるんですけど、その人の目がおかしいんです。パニック寸前というか。洞くつに慣れてないのか、体調がおかしかったのかわかりませんけど。そこでエアを見ると50だったんです。みんなのエアをみると100以上あったんですけど、このままではトラブルに発展するかもしれないと思い、私たちは充分減圧して上がったんです。ということで桝谷さんたち3人は遅れたのです。ところがあがって10分しても桝谷さんたちがあがってこない。そこでうちの藪本君に見てもらいに行かせたんです。しかし、5分たってもあがってこない。不安になって私も潜ったんです。最初のホールの中に藪本君がいたんです。「桝谷さんがいない」というんです。私は先にあがったのかな、と一瞬思いました。しかし、捜してみようということで、奥の洞くつへ行ったら、水中ライトが転がっていて、3人が倒れていたんです。

——洞くつの中で何が起きたんですか。

新嵩　さあ、これは想像するより仕方がないんですけど、河合さんの遺体をあげるとき耳が異常に腫れあがっていた。そして、河合さんの身体に砂がかかっていた。残圧は少し残っていました。ところが桝谷さんと浦山さんのエアはほとんどなくなっていた。死因はちっ息死です。レギュレーターをタンクからはずすとき簡単にとれたから、エアは最後まで吸ったのだと思います。

——ということは？

新嵩　これは私の推測ですが、一番奥の穴に入ったとき、風邪をひいていた河合さんが、何かの要因で耳が痛いかどうかしてパニックになったんではないか、と思うんです。そして、桝谷さんと浦山さんがそれを取り押さえようとしているうちに巻き込まれたのだと思います。そして、河合さんもパニックで暴れ回った、ということではないかと思います。

——洞くつという条件がパニックに結びついたのかもしれませんね。

新嵩　そうですね。洞くつの中では、

●与那国島周辺ダイビングスポット（ダイバー仲間の通称）

■……ダイビングスポット 20ヶ所

6ジョウドロップオフ 30~40m
6ジョウビーチ 8m
マボロシポイント 30m
ウマバナサメ穴 上8m 下40m
ウマバナはなれ岩 上8m 下35m
ドロップオフダンノ 上15m 下35m
馬鼻崎
ダンノ 10m
西崎東上3m 下18m
西崎沖の根 上20m 下30m
西崎（イリザキ）
与那国島
東崎（アガリザキ）
東崎ポイント 上12m 下20m
サンニヌ台ポイント
立神岩ポイント 12m
事故現場
新川崎
西崎ポイント 上30m 下50m
ダブルアーチ 上18m 下30m
ヌルガントンネル 6m
サバチの洞窟 上6m 下45m
マンタの里 8m
カメポイント 18m
遺跡ポイント 上9m 下30m
新川ポイント 上15m 下50m

緊急特集

Diving Document for Safety

何かのトラブルがあると、水面にあがれない。それがパニックの引きがねになったかもしれません。それで混乱を起こしたと思います。しかし、あの洞くつはホールのように大きな洞くつで、あなたが考えているような複雑なものではありません。そして、何か引っかかるような危険なものではありません。これは一緒に潜ったダイバーに聞いてもらえればわかると思います。それと、なぜ河合さんの体調が悪くても入れたのかということですが、桝谷さんが連れてきたお客さんですから、それをやめろとはいえませんよ。以上が、今回の事件のあらましですが、もし、私のいったことを実証したいのなら、実際に与那国へ来てください。そうすれば私がサバチ洞くつに案内します。

守らなければならない3つの原則

新嵩氏へのインタビューにより、洞くつ内での事故は、河合氏の風邪が誘引したものではないかと思われる。もし、そうであるならば、ここに問題が3つある。

1つは、洞くつダイビングの問題。洞くつがたとえ巨大だとしても、水深30㍍の深さで、奥行きが45㍍もある洞くつにダイビングすること自体に問題があるのではないか。

新嵩氏は洞くつを安全だとしているが、アメリカでは開口部の見えない洞くつでのダイビングは固く禁止されている。それは洞くつ内でアクシデントが起きた場合、それに対応できないからだ。もし、開口部の見えるところで今回のトラブルが発生したのなら死亡事故にはつながらなかったに違いない。

2つは、たとえ誰に頼まれようとも、風邪を引いたダイバーをダイビングさせることは間違いだ。もし、事故が起きた場合、インストラクターと同様に現地のガイドも、そのダイビング計画の全責任を負うことになる。だから心情的に断りきれない状況にあったとしても、人命第一を考え、断固拒否すべきである。

アメリカでのボートダイビングでは、キャプテンやガイドダイバーの権限は絶対である。それは事故が起きた場合、遺族がただちにキャプテンやガイドを訴えるからだ。だから、事故を起こさないため訴えられないためにキャプテンやガイドの権力は絶対なのだ。このことはインストラクターもガイドも客も心すべきであろう。ガイドが権限をもつことで事故がなくなる可能性が高い。なぜなら、彼らが海を一番よく知っているからだ。

3つは、ダイビング中の魚介類の採取である。新嵩氏は漁師としての採取の権利があり、エビ獲りに問題はない。しかし、桝谷氏や河合氏にエビ獲りをさせることには問題がある。

一般ダイバーの魚介類の採取は違法である。海の生物はすべて国のものであり、漁師はその生活権を守るために国から漁業権を与えられているにすぎないのだ。それを一般人に採取させることには問題があるのではないだろうか。それが事故に結びつくとなればなおさらのことである。このことだけは、はっきりと漁業に従事する者は守ってほしい。もし、エビ獲りを行うなら漁師が漁業行為で採取し、ダイバーの食事にのせるべきだ。

与那国島のダイビング事故は、洞くつ、エビ獲り、風邪とダイビングする時のタブーが3つも重なり、不幸な事態へと発展してしまった。私たちは、二度とこのような事故を起こさないために、今回の事故を教訓としなければならない。なお、今回の事故を検証するため、関係者の方々を実名で報道させていただいた。

洞くつダイビングは、開口部が見えるのが原則だ。

唐沢嘉昭（PADIインストラクター）

洞くつのような閉所では、心理的抑圧が大きくなります。空気の消費量も増すでしょう。洞くつの入口が水深35㍍、洞くつの中はやや浅く18㍍ぐらいまでの高低差があるといわれています。

もともとの潜水計画が40分だということですが、往復とも35㍍の入口を通ることを考えれば、かなりぎりぎりまで空気を使って浮上するプランだったと思われます。このような直接水面に浮上できないところでの潜水活動では、空気の1／3を行路にあて、帰路に1／3、予備に1／3残すのが鉄則です。

この洞くつは沈澱物が多くなく、グループで入ったために視界が大きく悪くなったわけではなかったようですが、複雑に変化する洞くつだったので方向感を失ったのでしょう。洞くつダイビングをすすめるつもりは毛頭ありませんが、もしやるのなら、開口部の大きな洞くつで、開口部が見える範囲に限定するのがルールです。それでも奥に入るのなら、必ずライフラインを引き、ところどころにケミカルライトを置きながら、帰りの手がかりを確実に残すことも必要となります。

テクニック的にはいくつかの方法が考えられますが、原則的には、レジャーダイバーには危険すぎる活動テーマであることを、肝に命じておくことです。

この種の事故が起きると、短絡的にダイビングは危険だ、さらにはマスコミや各省庁がそれに便乗して、ビギナーの養成はどうなっているのか、またインストラクターは何をしていた、という批判も起きるのです。ところが自動車の教習場では、フルブレーキの踏み方は教えません。教えられないのです。今回の事故のような特殊な条件のもとに実施されるダイビング活動については、あくまでもダイバー本人が自ら学んで、ノウハウを蓄積することが何よりも大切なのです。

現地の関係者の中には、3人の事故者のうちの1人が、風邪を引いていて、耳抜きにてこずっていた、そのため高低差のある水中洞くつの中で、リバースブロックを起こしてパニックになったと推測する人もいます。だがリバースブロック、中耳のスクイズも、相対的に圧力変化の激しい水面近くで起きるもので、約20㍍もの深度では考えにくいのです。現地の関係者の取材を本誌がすすめたところ、この水中洞くつは、私たちがすぐに想像するほど小さい、窮屈なものではなく、かなりの広さのものだったことが分りました。しかしながら事故者3人はほとんど奥の穴で発見され、2人は完全に空気ゼロ、1人は40ほど残っていたそうです。入口を見失ったのが原因なら、この40の空気残量が何を意味するのでしょうか。少なくとも1人はまだ40は生還のチャンスがあったはずです。

残念なことにダイビング事故は起きてしまった場合には、なかなか真相はつかめません。海は生き物です。ときには機嫌の悪いときがあります。それどころか、機嫌の良い顔をしながら、意地悪をすることもあるのです。